金田城　長崎県対馬市美津島町黒瀬城山

奈良時代『日本書紀』によると、金田城が築かれたのは天智天皇６年（667）日本国家をあげての朝鮮式山城で国の防衛を目的として、防人（さきもり）と呼ばれる兵士が駐在しました。浅茅湾（あそうわん）に突き出た半島の北端に位置し一周するように石塁をめぐらせた城壁は急な斜面をめぐるように築かれている。城戸（きど）は全部で三箇所あり城内への侵入を防ぐ構えとなっている。江戸時代には対馬海峡近海に外国船の往来があり遠見番所が設置され、明治維新後には日露戦争に備えた軍事拠点として使われた日本で一番歴史を持った城といえる。(同城の説明版とパンフ)

麓にある表石

高台から浅茅湾が一望できる

三の城戸は 7m 近くの高さまで積み上げられ水門の機能もしている

二の城戸は遺構を保護するために上に網で保護している。

今後発掘調査の予定地

城外へ張出す石垣で見張り台があったと推定される。石垣の異なった積み方があり江戸時代に改修されたと推測されている

切通しがあり明治以降の軍事的通路　　城壁がまだ残っている

今は木が成長し邪魔しているが、海が一望でき遠見番が外国船の往来やバルチック海軍の動きもを偵察していた